実施：2020 年 1 月 20 日 (月) 9:10-10:40, H-401 室

2019 年度 **後 期 定 期 試 験** (問題 兼 解答用紙)

開講学部	評点小計
理工学部	

評 点

問題枚数	両面印刷	別紙解答用紙	試験時間	試 験 科 目 名	クラス	出 題 者
2	有	なし	80 分	代 数 学 5 月曜 1 時限, 教科書：Original (§§1 − 9)	A, B	大 西 良 博

持込許可物件	所属学部	所属学科	学年	学 籍 番 号 (9 桁)	氏 名
なし	理工学部	数学科	年		

注意 1. 最終的な答に至る途中の説明をできるだけ詳しく書くこと. 最終結果だけでは得点できない.
注意 2. 学生証, 記名用のペン, 鉛筆またはシャープペンシル, 消しゴム以外は机の上に置かないこと.
注意 3. 試験場の静粛を保つために, 退出は開始 60 分後の時点の一回限りとする.

$\boxed{\mathbf{1}}$ (10 点) p を素数とし, K は標数 p の体とする. 任意の元 $a, b \in K$ に対し, 次が成り立つことを示せ.

$(a+b)^p = a^p + b^p$.

$\boxed{\mathbf{2}}$ (15 点) 体の拡大 L/K と中間体 M_1, M_2 があつて

$$[M_1 : K] = m_1,\ \ [M_2 : K] = m_2,\ \ \gcd(m_1, m_2) = 1$$

とせよ. このとき $M_1 \cap M_2 = K$ であることを示せ.

$\boxed{\mathbf{3}}$ (10 点) 代数的拡大 L/K に対し, $L \supset R \supset K$ なる環 R は体であることを示せ.

$\boxed{\mathbf{4}}$ (15 点) $f(x) = x^3 + 3x + 2$ は $\mathbb{F}_5[x]$ の既約多項式である. これの根の 1 つを α とし $K = \mathbb{F}_5(\alpha)$ とせよ. このとき, $\alpha^2 + 1$ の逆数を α の 2 次以下の多項式で表せ.

$\boxed{\mathbf{5}}$ (15 点) 次の体の間の包含関係を Hasse 図で示せ.

$$\mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}, \omega),\quad \mathbb{Q}(\sqrt{3}\,i),\quad \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\,),\quad \mathbb{Q},\quad \mathbb{Q}(\sqrt[3]{2}\sqrt{3}\,i).$$

また, 隣接する体の間の拡大次数も求め書き入れよ.
但し i は虚数単位で $\omega = \frac{-1+\sqrt{3}i}{2}$.

学 籍 番 号 (9 桁)	氏　　　名

6 (5 点) 体 k と不定元 t について, $K = k(t^5)$, $L = k(t)$ とせよ.

(1) $[L : K]$ はいくつか.

(2) $\alpha = t^2 + t + 1$ とおく. $K(\alpha) = L$ であることを示せ.

(Hint : まとめの (13).)

(3) t を t^5 と (2) の α の有理式で具体的に書け.

(Hint : t が $\beta = \alpha - 1$ と t^5 で表せればよい. $t\beta$, β^2, β^3 を計算してみる.)

7 (10 点) 代数的拡大 L/K とそれの 2 つの真の部分体 M_1, M_2 で次の様な例を挙げよ. $[\,M_1M_2 : M_1\,] < [\,M_2 : M_1 \cap M_2\,]$.

学 籍 番 号 (9 桁)	氏 名

8 (10 点) 体 $\mathbb{Q}(\sqrt[4]{2}\,)$ の自己同型をすべて求めよ.

9 (10 点) K を体, α, β を K 上代数的な元とする. このとき,

$\mathrm{irr}\,(\alpha, K, x) = \mathrm{irr}\,(\alpha, K(\beta), x) \iff \mathrm{irr}\,(\beta, K, x) = \mathrm{irr}\,(\beta, K(\alpha), x)$

であることを示せ.

学 籍 番 号 (9 桁)	氏 名

記　号

$\mathbb{N}$ … 自然数全体, $\mathbb{Z}$ … 整数全体のなす環, $\mathbb{Q}$ … 有理数全体のなす体,
$\mathbb{R}$ … 実数全体のなす体, $\mathbb{C}$ … 複素数全体のなす体.　$\omega = \frac{-1+\sqrt{3}i}{2}$.

既習事項のまとめ

(1) 体 L の部分集合 K が L の演算に関して体であるとき, K を L の部分体, あるいは L は K の拡大といひ, この状況を体の拡大 L/K と記す.

(2) 体の拡大 L/K に対して K 上の vector 空間としての L の次元を L/K の拡大次数と呼び $[L:K]$ で表す. 3 つの体 $K \subset M \subset L$ について $[L:K] = [L:M][M:K]$.

(3) 体の拡大 L/K について, 任意の $\alpha \in L$ がある $f(x) \in K[x]$ の根であるとき, L/K を代数的拡大と呼ぶ.

(4) 体の拡大 L/K について, $[L:K] < \infty$ のとき, これを有限次拡大と呼ぶ.

(5) 体 K が体 M の部分体で, M が体 L の部分体であるとき, M を L/K の中間体と呼ぶ.

(6) 体 L とその部分体 K および $\alpha_1, \cdots, \alpha_n \in L$ に対し, K のすべての元と $\alpha_1, \cdots, \alpha_n$ をすべてを含む最小の体を $K(\alpha_1, \cdots, \alpha_n)$ と記す. これは K に係数をもつ様な $\alpha_1, \cdots, \alpha_n$ の有理式の全体に他ならない.

(7) ある体 L がその部分体 K と $\alpha \in L$ によつて, 上の記法で $L = K(\alpha)$ と書けるとき, L は K の単純拡大であるといはれる.

(8) 2 つの部分体の共通部分は再び体であるから, どんな体 K についても, それに含まれる最小の体が存在する. それを素体と呼ぶ. 素体は有理数体 $\mathbb{Q}$ か p 元体 $\mathbb{F}_p = \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$ (p は素数) に同型である.

(9) 体 K の積に関する単位元 1 をいくつか加へて 0 になるとき, その最小の個数は K の標数といはれ, それは素数である. 1 をいくつ加へても 0 にならない場合は, 標数は 0 であるといふ. K 標数を $\mathrm{char}\,K$ と記す. 前者の場合は素体が $\mathbb{F}_p$ であり, 後者の場合の素体は $\mathbb{Q}$ である.

(10) 拡大 L/K と $\alpha \in L$ について, α を根とし, 最高次係数が 1 であり, 次数が最小な多項式 $f(x) = K[x]$ が唯 1 つ存在し, それを α の最小多項式と呼んで $\mathrm{irr}\,(\alpha, K, x)$ で表す.

(11) 拡大 L/K と中間体 M_1, M_2 について, M_1 と M_2 を含む最小の部分体を M_1M_2 または M_2M_1 と書いて, M_1 と M_2 の合成体と呼ぶ. また, 拡大 M_1M_2/M_1 を拡大 M_2/K の M_1 による持ち上げと呼ぶ.

(12) 体 K を含む体 Ω 上に代数的拡大が存在しないとき, Ω は代数的閉体といはれ, さらにもし, Ω/K が代数的拡大であるならば Ω は K の代数的閉包といはれる. 任意の体 K に対し, その代数的閉包が存在し, すべて同型である. それを一般に $\overline{K}$ と記す.

(13) 体の拡大 L/K があり, $\alpha, \beta \in L$ とせよ. $[K(\alpha):K] = m$, $[K(\beta):K] = n$, $\gcd(m,n) = 1$ ならば $[K(\alpha,\beta):K] = mn$ である.

(14) 多項式 $f(x) \in K[x]$ のすべての根で K 上される様な体を $f(x)$ の最小分解体といふ.

(15) 拡大 L/K が, どんな既約多項式 $f(x) \in K[x]$ も L 内に 1 つ根を持てば, $f(x)$ が L 上 1 次式のみの積に分解する, といふ性質を持つとき, L/K は正規拡大であるといはれる.

(16) 正規拡大の "底上げ" や持ち上げは正規拡大である. また K 上の 2 つの正規拡大の合成体はまた K 上の正規拡大である.

(17) 多項式 $f(x) \in K[x]$ が重根を持たないとき, $f(x)$ は分離的であるといはれる. 拡大 L/K において, $\alpha \in L$ が K 上の分離的多項式の根であるとき α は K 上分離的であるといはれ, さらに, すべての $\alpha \in L$ が K 上分離的であるとき, L/K を分離的拡大と称する.

(18) 分離的拡大の持ち上げは分離的拡大である. また K 上の 2 つの分離的拡大の合成体はまた K 上の分離的拡大である.

(19) あらゆる代数的拡大 L/K が分離的である様な体 K は完全体と呼ばれる. 標数が 0 である体や有限体は完全体である.

(20) 代数的拡大 L/K について, L から $\overline{K}$ への中への K 上の同型の個数を $[L:K]_s$ と記す. $\mathrm{char}\,K = p > 0$ のとき, これは p の冪になる.

(21) 分離的拡大は単純拡大である.

(22) 正規かつ分離的な代数的拡大を Galois 拡大と呼ぶ.

(23) 有限次 Galois 拡大 L/K とその Galois 群 $G = \mathrm{Gal}(L/K)$ について, $\mathscr{F}(L/K)$ を L/K の中間体の全体, $\mathscr{G}(G)$ を G の部分群の全体とせよ. 各 $H \in \mathscr{G}(G)$ に対し $L^H = \{\, \alpha \in L \,|\, \alpha^\sigma = \alpha \ (\forall \sigma \in H\,) \}$, 各 $M \in \mathscr{F}(L/K)$ に対し $G^M = \{\, \sigma \in G \,|\, \alpha^\sigma = \alpha \,(\forall \alpha \in M\,) \}$ と記す. このとき $G^M = \mathrm{Gal}(L/M)$ である.

(24) Galois の基本定理 1

(23) の状況下で, $\varphi: H \mapsto L^H$ は $\mathscr{G}(G)$ から $\mathscr{F}(L/K)$ への包含関係を逆転させる全単射であり, 逆写像は $\varphi^{-1}(M) = G^M$ で与へられる.

(25) Galois の基本定理 2

(23) の状況下で, $M \in \mathscr{F}(L/K)$ について次が成り立つ.

(1) $\tau \in \mathrm{Gal}(L/K)$ に対し, $\tau\,\mathrm{Gal}(L/M)\tau^{-1} = \mathrm{Gal}(L/M^\tau)$.

(2) M は K の Galois 拡大 $\iff$ $\mathrm{Gal}(L/M) \lhd \mathrm{Gal}(L/K)$.

(3) (2) の両側が成り立つとき, $\mathrm{Gal}(M/K) \simeq \mathrm{Gal}(L/K)\,/\,\mathrm{Gal}(L/M)$ （群としての同型）.